

Nursing Professionalism: A National Survey of Professionalism among Japanese Nurses

田中, 理子

<https://doi.org/10.15017/1398280>

出版情報 : 九州大学, 2013, 博士 (看護学), 課程博士
バージョン :
権利関係 : 全文ファイル公表済

博士学位申請者：田中 理子

論文題名：Nursing Professionalism: A National Survey of Professionalism among Japanese Nurses
(日本における看護専門性の現状)

区 分：甲

論 文 内 容 の 要 旨

【研究背景】

看護はこの30年で看護を取り巻く社会的変化と医療変化によってその役割と自律性を拡大し、劇的な変化を遂げてきた。他国と同様に日本でも医療現場での看護専門化は顕著に要求されてきた。しかしながら、日本の看護師の看護専門性の現状については、その実態はほとんど知られておらず、専門性に基づく態度、知識、行動は明確に示されているとはいえない現状である。その原因として、看護の専門性に帰属する行動を評価する尺度は未だに存在しない点が指摘できる。そこで、日本の看護の専門性に帰属する評価尺度の開発が望まれるがその前段階として、日本の看護の専門性に帰属する行動に関する調査が必要であると考えられる。

本研究の目的は既存の尺度を応用し、日本の看護専門性に関する調査を行い、その基礎となる帰属行動の現状を検討することである。

【研究方法】

第1段階として調査票開発のパイロットスタディーとして、Professionalism in Nursing Behavioral Inventory (PNBI)の日本語版をバックトランスレーション手法にて開発し、信頼性係数、再テスト法、Spearmanの順位相関係数を用いて信頼性・妥当性の検証を行った。第2段階ではPNBI日本語版を使用し、全国に353施設ある大学・大学病院からランダム抽出した44施設、2,758名の看護師・看護教員を対象に全国調査を実施した。データ分析は、基本統計の算出と、プロフェッショナリズムと学位、職位、経験年数、看護実践分野との関係をみるために一元配置分散分析を行い、有意差がみられた項目についてTukey-Kramer多重比較を行った。なお、本研究は、九州大学病院倫理審査委員会の承認を受け実施した(許可番号22-107)。

【結果】

第1段階の結果は、分析対象は1014件(有効回答率76.0%)であり、信頼性の検証は信頼係数0.66、再テスト法は $r=0.69\sim 0.94$ であった。妥当性の検証では、基準関連妥当性のSpearmanの相関係数 $r=0.41\sim 0.46$ 、既知グループ法を用いた構成概念妥当性では全ての比較項目が $p<.0001$ でモデルの適合度を確認した。

第二段階の結果は、分析対象は1501件(有効回答率54.4%)であり、PNBI日本語版の総合得点は平均6.74点(SD±3.89)であった。下位尺度で最も得点が高かったのは「継続教育能力」(1.37点SD±0.74)で、最低点は「出版活動とコミュニケーション」(0.19点SD±0.58)であった。

学位とプロフェッショナリズムには有意差がみられ($F=138.62, p<0.0001$)、多重比較によると専門学校卒と短大卒の間には有意な差はみられないが($p=0.853$)、それ以外では学位が高くなるほど専門性の得点が高かった($p<0.0001$)。

経験年数とプロフェッショナリズムには有意な関係が示され($F=111.24, p<0.0001$)、多重比較では、経験年数が0-5年と6-10年では有意な差はないが($p=0.995$)、それ以外のグループでは経験年

数が上がるごとにプロフェッショナリズムが有意にあがることが明らかになった ($p < 0.001$)。

職位とプロフェッショナリズムにも有意差がみられ ($p < 0.0001$)、多重比較ではスタッフのプロフェッショナリズムが有意に低く、専門看護師・認定看護師と師長・副師長では有意差はなかった ($p = 0.243$)。看護実践現場の違いによるプロフェッショナリズムに有意差は見られなかった ($p = 0.395$)。

【考察】

本研究では PNBI 日本語版が信頼性と妥当性の基準を満たした有用性の高い尺度であると判断した。

全国調査では高学歴なほど高い看護専門性を示す結果が示唆された。この結果は単に専門性に学位が必要ということだけでなく、学位保持者は看護専門性が高いということであり、このことは質の高い看護実践が提供されることに繋がる。この点は患者にとって非常に有益である。

また、一方で看護の知識の全てを大学で習得するわけではない。むしろ仕事上の経験から習得されることが多いこともいわれている。本研究では、経験年数が 10 年以上の看護師では経験年数が上がるごとに有意に PNBI 総合得点が上昇していた。特に、「学位」以外の全ての下位尺度の得点は経験年数が増す毎に高くなっており、看護の専門性を向上させるためには経験という側面も重要な意義があると考えられる。経験年数による専門性を促進させるためにも、早期離職を予防するための工夫として、政治的調整、労働状況改善、環境管理等が今後更に必要となると考える。

本研究結果において、管理者と教育者は最近の研究結果と同じように高い専門性を有していた。日本においても看護管理者や教育者は全ての看護師の理想の看護リーダーとして、そして専門職である看護師の代表として認識されている。将来的には看護実践とアカデミックの両側面をバランス良く融合させて看護の専門性を発展させていくことが望ましいと考える。

【結論】

本研究結果は日本で初めて世界と同レベルの尺度を用い看護専門性の現状を量的に示したものである。米国と日本では看護の背景や文化が異なるが、看護の専門性は同じように重要視されている。この研究結果は日本の看護専門性を継続して評価するうえでの基礎的資料として活用可能である。